

〔感情〕を表す形容詞述語文の構造

朴 海 煥

【キーワード】 〔感情〕形容詞 文型論 文の構造 語の意味 助詞の機能

【要旨】

本稿は、旧稿「〔関係〕を表す形容詞述語文の構造」(拙稿(1995))に引き続き、〔感情〕の意味を表す形容詞述語文について文型論の観点から文の構造と語の意味を研究したものである。本稿でいう文型論の観点とは、述語を軸として結合する名詞句と助詞の三者間の結びつきの構造とその構造を決定づける原因・背景となる語の意味的な特徴との関係を文型の面から分析するという観点である。

本稿の目的は、〔感情〕を表す形容詞述語文に使われる主な文型を把握すること、各文型の特徴を名詞句や述語形容詞の意味的な特徴と助詞の役割を中心に分析すること、文型の観点から〔感情〕を表す形容詞述語文の構造を明らかにすることなどである。

〔感情〕を表す形容詞はさらに〔快楽苦悲、劣等・罪悪感、願望、感謝、その他の形容詞〕の5種類に下位分類した。各下位意味項目別に使われる文型を抽出し、その文型を単位にして各々の文型における名詞句の意味特徴や助詞の役割などを詳しく分析することで、文の構造と語の意味との関係を明らかにしていくことにした。

文型別の分析の結果、〔感情〕を表す形容詞述語文は、表現主体を表す名詞句の省略が多いこと、2項目の文型が多いこと、助詞「に、を」の用法などにその特徴が現れることが分かった。

このような観点の研究は、結合価や格支配などを含むより広い範囲の文構造の分析、語の意味論と構文論的文法論との接点の追求、文型による新しいタイプの語の意味記述、日本語教育への応用などの面で有意義な広がりを持つと思われる。

0. はじめに

文レベルの言語表現は多くの場合文法的ともいえるある種の規則性に基づいた構造を有している。そして、そのような構造を決定づける最も重要な要因の一つとして「語の意味的特徴」が挙げられる。本稿では、この「文の構造と語の意味との関わり方」について〔感情〕を表す形容詞述語文を対象にして分析を行う。分析において特に注目したいところは、文の主たる構成要素である「名詞句・助

詞・述語形容詞」の三者のむすびつきの構造とその原因・背景の究明である。具体的には、名詞句と述語形容詞の場合はその意味的な特徴を、助詞についてはその役割を分析することで、文の構造と語の意味との関係を追求していきたい。このような点から本稿は形容詞述語文に対する文型論的語義研究としての一つの試みといえる。

形容詞の意味の分類についてはその名称の与え方こそ様々であるが、知覚主体の主観的な感情・感覚を表す「感情」形容詞と知覚対象の客観的な性質・状態を表す「属性」形容詞とに二大別するのが一般的である。本稿で対象とする〔感情〕形容詞とは、上述した感情・感覚を表す「感情」形容詞のうち、〔感覚〕を表すものを除いた狭義の意味での「感情」形容詞である。形容詞述語文の中でも特に〔感情〕を表す文を選んだ背景には、〔感情〕を表す形容詞述語文の構造を明らかにすることと共に、〔感覚、性質、状態〕などのような様々な意味特徴を持つ形容詞述語文との比較の基準を立てることで、日本語の形容詞述語文全体の構造分析の根拠を作るという目的がある。

分析考察の対象となる資料としては主として実際の言語作品からの用例を使う。助詞に関しては「が、から、で、と、に、は、より、を」などを分析の対象とするが、特に「が」と「は」以外の助詞の用法に注目したい。

1. 分析の手順

本稿の分析の手順としては、まず〔感情〕の意味を表す形容詞の範囲を決め、さらにそれを下位分類した各々の意味項目について分析を行うことにする。下位項目別の分析においては、まず各項目の形容詞述語文のとり主な文型を抽出し、その文型の単位で文の構造と語の意味との関係の分析を行う。対象形容詞の範囲の選定や下位分類および文型の抽出においては、形容詞文研究のために作成した基礎資料を使った⁽¹⁾。この基礎資料とは、様々なジャンルの言語作品約200件から採集した約5000文の実例を対象として、形容詞文における「名詞句・助詞・形容詞」の三者の結びつきの構造とその構造の背景にある語の意味特徴を細かく分析した実態調査である。

このような分析の結果を根拠にし、最後には本稿の結論として、〔感情〕を表す形容詞述語文のとり主要文型と各文型の特徴、〔感情〕を表す形容詞述語文全体の構造の特徴をまとめることにする。⁽²⁾

2. 〔感情〕を表す形容詞

本稿で扱う〔感情〕形容詞は上述したように感情・感覚を表す「感情」形容詞のうち〔感覚〕を表すものを除いた狭義の意味での「感情」形容詞のみを対象と

する。〔感情〕を表す形容詞はさらに述語形容詞の意味特徴と使われる文型の特徴を考慮にいれ、〔快樂苦悲、劣等・罪悪感、願望、感謝、その他の形容詞〕の5種類に下位分類した。5種類の分類の基準および対象形容詞は次のようである。

①〔快樂苦悲〕：

1. 本義：「嬉しい、おかしい、おもしろい、快い、楽しい」、「恐ろしい、悲しい、苦しい、恐い、寂しい、切ない、辛い、虚しい」など
2. 転義：「明るい、温かい、熱い、軽い」、「痛い、重い、暗い」など

②〔劣等・罪悪感〕：「恥ずかしい、悪い」など

③〔願望〕：「欲しい、望ましい」など

④〔感謝〕：「ありがたい」

⑤その他の形容詞：

1. 〔好き嫌い・好悪〕を表す「可愛い、憎い、ありがたい、眩しい」など
2. 〔羨望〕を表す「羨ましい」
3. 〔安心〕を表す「頼もしい」
4. 〔回想〕を表す「懐かしい」
5. 〔悔恨、残念、必要〕を表す「惜しい、悔しい」など

以下、この下位分類に従い、各々の形容詞述語文における文の構造と語の意味との関係について分析を行う。

3. 〔快樂苦悲〕を表す形容詞述語文

〔快樂苦悲〕を表す形容詞には、語彙的な意味の上で〔感情〕を表すものと語彙的な意味では〔感情〕を表す形容詞ではないが文脈的な意味の上で結果的に〔感情〕を表すものの2種類がある。本稿では、前者を本義的形容詞、後者を転義的形容詞と称する。また、〔快樂苦悲〕を表す形容詞は、文型の面で本義・転義的用法の2種類がそれぞれ異なった特徴を見せていることを重視し、これらを別々に分けて扱うことにする。上述したように、本義的形容詞には「嬉しい、おかしい、おもしろい、快い、楽しい」、「恐ろしい、悲しい、苦しい、恐い、寂しい、切ない、辛い、虚しい」などがあり、転義的形容詞には「明るい、温かい、熱い、軽い」、「痛い、重い、暗い」などがある。

3.1. 本義的形容詞

3.1.1. 「名1は・が+形」（「名2は（が）+名1が+形」）

〔快樂苦悲〕を表す本義的形容詞述語文のとり基本的な文型は「名1は・が+形」（「名2は（が）+名1が+形」）である。

まず、1項目表現としては、

(1) 直接肌を触れ合わせるのはたしかに快い。（セバス180）

(2) 富士が大気のよどみで汚れて見える日は悲しい。（天声830318）

(3)校了日の翌る日で、社を休んだので、よけいに夜の十一時半を待つ時間が苦しかった。(霧の113)

などがある。2項目表現としては、

(4)また、私は私に寄せてくれるその心が嬉しい。(恵子244)

(5)当時、日本にはまだスーパーマーケットは出現していなかったので、私は毎日、このスーパーで買い物をするのが楽しかった。(北京138)

(6)これまで馬を取扱ったことのない私は、馬が極度に恐ろしかった。

(駅長63)

などが挙げられる。

〔快樂苦悲〕だけでなく、〔感情〕を表す形容詞述語文は主に第1人称の心理現象を表す場合が多く、そのようなときには心理現象の持ち主を表す名2項目の名詞は省略されることが多い。これも〔感情〕を表す形容詞述語文の一つの特徴であるが、このような人称制限については今までの先行研究でも広く取り上げられている。本稿では「名1は・が+形」（「名2は（が）+名1が+形」）のように1項目表現と2項目表現を一括して記述することにする。

名詞句の意味特徴としては、1項目の表現には〔快樂苦悲〕の判断の原因、出所の性格の名詞句がくる。意味特徴には特に制限はない。「嬉しい、おかしい、快い」は「態度、時、言葉、気持ち、表情、姿」などのように原因にあたるものごとが瞬間的で具体的である傾向がある。「おもしろい、楽しい」は「作品、話し、発想、教え、芝居、生活」などのように時間的な幅を持った総合的な性格を持っている。2項目表現の名1項目は1項目表現の場合と似ている。名2項目には主に心理状態の持ち主、特に一人称が多く使われる。その他、第三者、または時間・場面などの背景的な要素もくるが、そのような場合も心理現象の持ち主の名詞句は省略されていることが多い。

3.1.2. 「名2に+名1は（が）+形」

〔快樂苦悲〕の形容詞述語文は基本的にその心理状態の所有主が想定される。その所有主が「に」をとり、「名2に+名1は（が）+形」の文型を表す表現も多い。

(7)直子には志津の方が面白かった。(その年346)

(8)「(前略)いまの私には、仕事の方が嬉しいわ。(四季113)

(9)しかし湯タオルにせよシャワーにせよ、それだけで身体が暖まるわけもなく、寒い冬のあいだなど、ことに私たち日本人には、これだけで「入浴」を済ますのは辛い。(色め150)

この表現の「に」の項目の名詞句の意味特徴は「名2は（が）+名1が+形」文型の「は（が）」項目と同様に人間を表すものが多い。また、名1、2項目は項目の順序が入れ替わり、「名2は・が+名1に+形」の文型をとる場合も多い。

(10)定次郎がかけつけてくれたことはきぬに嬉しかった。(静原204)

- (11)休みの日には、ピアノにむかっておもむろに発声練習をしてから、高校の教科書にピアノ伴奏付きで出ている〈会津磐梯山〉などの日本民謡を練習するのが、充江にはおかしかった。(青桐215)

3.1.3. 「名2は・が+名1に+形」

〔快樂苦悲〕を表す形容詞述語文の特徴の一つに心理現象を感じる主体として人間そのものを表す名詞句ではなく「目、耳、肌、胸、心」などのような人間の身体やその部分、または人間の精神現象を表す名詞句がくる用法がある。

- (12)「おからかいになつては困りますわ」と、珠子は軽くいなしたつもりであつたが、男の賛辞は耳に快かつた。(放浪83)

- (13)そう言われて山盛りに盛られためしを松吉と向き合つて食べる図は、子供心にも淋しいものだった。(ダイヤ300)

この用法の場合、「に」の項目は人間の感じる感覚や心理現象の窓口の役割をすることになる。この点、「3.1.2.」の「名2に+名1は・が+形」文型の名2項目の助詞「に」の述語判断を感じる主体とは性質が異なる。当然、「名2に+名1は・が+形」文型の項目の順序が入れ替わつた「名2は・が+名1に+形」文型の「に」の項目の名詞句とも性質を異にする。

この文型の場合、「に」は名1項目にくるが、次の例文のように名1、2項目の順番の交替が可能な場合もある。これは「名2に+名1は・が+形」文型の用法との接点ともいえる。しかし、この場合の「に」は「は」と交替はできない。

- (14)歩き疲れた足には、木肌のやさしさが何より嬉しい。(つれづ159)

3.2. 転義的形容詞

3.2.1. 「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)

〔快樂苦悲〕を表す転義的形容詞述語文のとる基本的な文型も「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)である。

まず、1項目表現としては、

- (15)「ありがとう」といって、包んで貰つて来たが、何だか心がぽかぽか暖かかつた。(共に31)

- (16)平松のおばあさんの家を出て、わが家へ向かう足どりは重かつた。
(かあち145)

などがある。2項目表現としては、

- (17)そういわれると、先に郷里を出てきた真帆は、ちょっと胸が痛かつた。
(はまな188)

などが挙げられる。

名詞句の意味特徴としては、1項目の表現には「胸、心」などのような〔快樂苦悲〕の心理現象を感じる具体的な対象としての身体の一部、または「気持ち」などの感情現象を表す名詞句がくる。本義的形容詞のような原因的な性格の名詞句は見当たらないが、これは転義的形容詞の用法の特徴といえる。2項目表現の

名1項目は1項目表現と同じである。名2項目には主に〔苦悲〕の心理状態を経験する持ち主を表す名詞句がくる。これには人間関係の名詞、特に一人称の表現が多い傾向がある。

3.2.2. 「名2は・が+名1に+形」

〔苦悲〕の心理現象を与える具体的な対象が強調される時は、その名詞句が助詞「に」をとり、「名2は・が+名1に+形」のように使われる。このような用法は「熱い、温かい、痛い」などのような〔感覚〕を表す形容詞に多く現れる。

(18) 白骨塔の名が、胸に痛い。(旅は143)

名詞句の意味特徴としては、名2項目には心理現象を与える具体的な対象を表すものが、名1項目には「胸、心」のような心理現象を感じる具体的な対象としての身体の一部を表すものがくる。

4. 〔劣等・罪悪感〕の「恥ずかしい・悪い」

4.1. 「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)

〔劣等・罪悪感〕の「恥ずかしい・悪い」などの形容詞述語文の基本的な文型は「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)である。

まず、1項目表現としては、

(19) 零細企業の弟に金を借りにきた自分が恥ずかしかった。(その年321)
などがある。2項目表現としては、

(20) 「おっ母さん、奴さん、こんどのことは重々ばくが悪かった。

(マダム69)

(21) 「努力」という額のかかった壁を見上げ、もうあといくらかも時間が残っていないのに私は何一つためになるアドバイスが出来ないのが恥ずかしかった。(フイリ261)

などが挙げられる。

名詞句の意味特徴としては、1項目の表現には〔劣等・罪悪感〕の原因の性格を持った名詞句、その中でも人間そのものや人間の行為に関するものが多い。2項目の場合は、名1項目は〔劣等・罪悪感〕をもたらした具体的な対象、主に人間の行為を表す名詞句がくる。名2項目には、〔劣等・罪悪感〕の持ち主としての名詞、主に人間関係の名詞句がくる。

「恥ずかしい」には名2項目の助詞として心理現象を感じる主体を表す「に」がくることがあるが、「悪い」にはそのような用法は見当たらない。これは、語彙的な意味の面で、「恥ずかしい」はある状況や特定の相手に対する判断主体の自発的な感情表現であるのに対し、「悪い」はある状況が原因になった特定の相手への感情表現であるという特徴の違いのためであると思われる。

4.2. 「名1に+形」(「名2は(が)+名1に+形」)

〔劣等・罪悪感〕はそのような心理状態を感じさせる原因としての相手が存在する場合がある。このような時は、相手を表す名詞句が助詞「に」をとり、「名1に＋形」または「名2は（が）＋名1に＋形」のように使われる。

(22)「(前略)まわりの人に恥かしいわ」(光る201)

(23)「(前略)君の家の人にわるいや」(放浪324)

この場合の「に」の項目には主に人間、その他人間と関わりを持つ集団などを表す名詞句がくる。このような相手を表す「に」用法は、〔劣等・罪悪感〕を表す形容詞述語文のみに現れる特徴である。この文型は主に会話文に多く現れるが、会話文の場合は〔劣等・罪悪感〕を感じる主体は省略されるのが一般的である。2項目表現として使われるときは、名1項目に相手、名2項目に〔劣等・罪悪感〕をもたらした具体的な行為を表す名詞句がくる。

5. 〔願望〕の「欲しい、望ましい」

5.1. 「名1は・が＋形」（「名2は（が）＋名1が＋形」）

〔願望〕の「欲しい、望ましい」などの形容詞述語文の基本的な文型は「名1は・が＋形」（「名2は（が）＋名1が＋形」）である。

まず、1項目表現としては、

(24)しかし何よりも大切な満寿夫の仕事の関係上、どうしても工房から歩いて行ける場所がもっとも望ましかったのだ。(スポット184)

(25)娘は女子美術へ通わせたが、えがきになるのは並々ならぬ勉強がいったし、早く良い結婚をしてくれることが望ましかった。(冬の5)

などがある。2項目表現としては、

(26)私は前からこの靴が一足欲しかった。(聖山93)

などがある。

名詞句の意味特徴としては、1項目の表現には〔願望〕表現の対象としての性格の名詞句がくる。意味特徴には特別な制限はない。2項目の表現の名1項目は1項目の表現と同様である。名2項目には、〔願望〕の持ち主を表す名詞句がくることが多い。主に人間関係の名詞が使われる。

〔願望〕の対象としての持ち主が一つの項目に収まって使われる用法は見当たらない。また、「欲しい」には心理現象を感じる主体を表す「に」の用法が見当たらない。これは、「欲しい」は語彙的な意味としてあるものごとに対する表現主体の感情を表すという特徴を持つためであると思われる。

5.2. 「(名3は)＋名2に＋名1が＋形」

「欲しい」の場合、〔願望〕表現の対象の具体的な内容、つまり「人間、資格、場所、時間」などのような名詞句が「に」をとり、「名2に＋名1が＋形」の文型を成すこともある。

(27) 同じ落書をするのなら、今の大学生にもこれくらいの知性と教養、そしてユーモアが欲しい。(色め208)

(28) 美術館にベビールームがほしい。(IPAL1035)

この表現の場合、名1、2項目の入れ換えは可能である。

(29) なんでもいいから、人の体温が肌に欲しかったのね(まどう364)

また、「名2に+名1は・が+形」の文型にもう一つの項目が追加され、「名3は+名2に+名1が+形」の3項目表現として使われることがある。しかし、文中では名3項目は省略されるのが普通である。

(30) 私は助手に彼がほしい。(IPAL1035)

5.3. 「(名3は)+名2に+名1を+形」

「(名3は)+名2に+名1が+形」の文型の場合、「(名3は)+名2に+名1を+形」のように「欲しい」の〔願望〕の表現対象の「が」の代わりに「を」を使うことも可能である。この場合の名1、2項目の順番は自由に交替できる。

(31) ひねると井戸水の出る蛇口を一つ台所に欲しい。(こころ183)

(32) 私はぜひその人を助手にほしい。(IPAL1036)

このように、〔願望〕の表現対象の項目に「を」を使う用法は「6.」の「ありがたい」と共に日本語の形容詞全体の用法の中でも特徴的である。

6. 〔感謝〕の「ありがたい」

6.1. 「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)

〔感謝〕の「ありがたい」形容詞述語文の基本的な文型は「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)である。

まず、1項目表現としては、

(33) はっと気づいて口を閉ざしてしばらくするとまたしゃべり出してしまうが、ご夫妻の快くうなずきながら病者の愚痴話に耳を貸して下さるご厚意がありがたい。(こうし53)

などがある。2項目表現には

(34) 私はあの時の君の心づかいがありがたいがたかった。(IPAL1036)

などがある。

名詞句の意味特徴としては、1項目の表現には〔感謝〕の判断の原因・対象の性格の名詞句がくる。具体的な物質名詞よりは行為、作用などのようなことからの名詞句が使われることが多い。2項目の表現の名1項目は1項目表現と同じである。名2項目には〔感謝〕の感じ・気持ちの持ち主を表す名詞句がくる。これには主に人間関係の名詞が使われる。

6.2. 「名2に+名1は(が)+形」

〔感謝〕の感じ・気持ちの持ち主が「に」をとり、「名2に+名1は(が)+

形」のように使われることもある。

(35)不正乗車の私には、一分の隙もないこの混雑は、むしろ有難かった。

(かあち147)

この文型の名1、2項目は順序の交替が可能である。

(36)場所が思ったより小さかったことが、碧雲にはありがたかった。

(桃花208)

6.3. 「名1を+形」

「ありがたい」が「ありがとう・ありがとうございます」などのような慣用的な挨拶の表現として使われるときは、〔感謝〕判断の原因、対象にあたる名詞句が「を」をとり、「名1を+形」のようにも使われる。

(37)「帽子を、ありがとう」(尋ね284)

この場合は〔感謝〕の感じ・気持ちの持ち主としての名詞句は文中に表れないのが一般的である。

7. その他の形容詞述語文

本稿では、〔好き嫌い・好悪〕を表す「可愛い、憎い、ありがたい、眩しい」など、〔羨望〕を表す「羨ましい」、〔安心〕を表す「頼もしい」、〔回想〕を表す「懐かしい」、〔悔恨、残念、必要〕を表す「惜しい、悔しい」などの形容詞は一括して扱うことにする。これらの形容詞は表す意味こそそれぞれ異なるが、文型的な特徴の面で〔感情〕を表す形容詞述語文のもっとも基本的な「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)文型と「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)文型の心理状態の所有主が「に」に現れる「名2に+名1は・が+形」文型以外の用法は持たないことから、「その他」と称して一緒に扱うことにしたのである。

7.1. 「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)

上述したように、これらの形容詞述語文の基本的な文型は「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)である。

まず、1項目表現としては、

(38)殺してやりたいくらい、自分が憎かった。(放浪443)

(39)鶏糞で播いた麦だけは乱雑な土の扱い方だが、ぞっくりといきのいい芽を揃えているのだけが頼もしい。(渙を75)

(40)やはり、故郷が懐しい。(恵子151)

などが挙げられる。2項目表現としては、

(41)「わたくしは、どちらかと言えば、和食の方が有難いんです」(紅花279)

(42)「確かに私は勇太くんが可愛い。(きらら57)

などが挙げられる。

名詞句の意味特徴としては、1項目の表現には、述語判断の対象としての名詞句がくる。意味特徴には特に制限はない。2項目表現の名1項目は1項目の場合と同様である。名2項目には、判断の感じ手としての感情の持ち主を表す名詞句、主に一人称の人間を表すものがくる。

7.2. 「名2に+名1は(が)+形」

この用法は、「名1は・が+形」(「名2は(が)+名1が+形」)文型の心理状態の所有主が「に」をとり、「名2に+名1は(が)+形」の文型を表すものである。

(43) 私たちにはやはり、有機農法のトマトの味がなつかしい。(天声830910)
この表現の「に」の項目の名詞句の意味特徴は「名2は(が)+名1が+形」文型の「は(が)」項目と同様に人間を表すものが多い。また、名1、2項目は入れ換えが可能な場合が多い。

(44) それでいて、てきぱきと健康保険の業務を果たしてくれるのが、滋にはたのもしかった。(四季60)

7. おわりに

以上、「感情」を表す形容詞述語文について、各々の形容詞文における文の構造と語の意味との相関関係および特徴の相違点の比較を中心として分析・考察してきた。その結果をまとめると、まず「感情」を表す形容詞述語文のとり主要な文型として、

「名1は・が+形」

「名2は(が)+名1が+形」

「名2に+名1は(が)+形」

「名2は・が+名1に+形」

「(名3は)+名2に+名1が+形」

「(名3は)+名2に+名1を+形」

の6種類が挙げられる。これらの文型の中でもっとも基本的なものは、「名1は・が+形」、「名2は(が)+名1が+形」、「名2に+名1は(が)+形」の3種類であることが分かった。もっともこの三つの文型は「感情」を表す形容詞述語文だけではなく、形容詞述語文全体の基本的な用法といえる。「感情」を表す形容詞述語文の文型の特徴は、これら以外の文型の助詞「に、を」、またこれら助詞の項目の順番や名詞句の意味特徴、そして述語の意味特徴との関係などの面でより著しく現れている。また、表現主体を表す名詞句の省略が多いこと、2項目の文型が多いことなども「感情」を表す形容詞述語文の構造の特徴といえる。特に、助詞「を」の用法は「感情」を表す形容詞述語文のみに現れる用法という点で注目すべきところである。

このような研究は、今後さらに範囲を広げ、〔感覚、性質、状態〕などの形容詞述語文全体の分析に進めて行くことに意味がある。そしてその結果を、動詞・名詞述語文を含む日本語の述語文全般に対する分析のための基準や土台として使っていくべきであると考ええる。

【注】

- (1) この資料を使った形容詞文一般に関する分析報告としては朴海煥「現代日本語の形容詞述語文の構造」(早稲田大学大学院修士論文(1994))がある。
- (2) 本稿の記述におけるいくつかの基準を示す。
 - ① 本稿でいう名詞句とは、述語形容詞と結合する「体言+助詞」のうち、体言の部分の意味する。単独名詞ではなく句や節の場合もある。
 - ② 本稿で扱う形容詞は言い切りの形がイである形容詞のみを対象とする。
 - ③ 名詞句の項目の順番に関しては、述語形容詞に近い項目から「名1項目、名2項目、名3項目」のように表記する。一方、名詞句の項目の数に関しては「1項目、2項目、3項目」のように表記する。
 - ④ 一つの項目に助詞「は」と「が」が併用される場合の名1項目以外の助詞は、名1項目に「が」が使われない時は「は・が」、使われる時は「は(が)」と表記する。
 - ⑤ 収用例にない言語特徴の場合、辞書類の記述を参考にしたところもある。
 - ⑥ 「に」や「を」のように「」の中の(に・を)などは助詞を表す。

【引用用例出典】

- (その年) 『その年の冬』 立原正秋(1926男) 講談社文庫1984(1979、80読売新聞連載)
- (青桐) 「青桐」 木崎さとこ(1939女) 『芥川賞全集11』 文芸春秋社1982所収(1984『文学界』)
- (色め) 『色めがね西洋草紙』 木村尚三郎(1930男) ダイヤモンド社1977
- (駅長) 『駅長さん、終点です』 植田義幸(1915男) 朝日新聞社1970
- (かあち) 『かあちゃん太閤記』 前田おま子(1918女) サンケイ出版1980
- (きらら) 『きららの指輪たち』 藤堂志津子(1949女) 講談社1990
- (霧の) 『霧の旗』 松本清張(1909男) 中公文庫1975
- (恵子) 『恵子ゴーオン』 笹森恵子(1932女) 汐文社1982
- (こうし) 『こうしてうつ病に勝った』 鷺山純一(1927男) 太陽出版1989
- (こころ) 『こころをばなににとえん』 岡部伊都子(1923女) 創元社1975
- (四季) 『四季の旋律』 丹羽文雄(1899男) 新潮文庫1986(1981新潮社)
- (聖山) 『聖山巡礼』 玉村和彦(1940男) 山と溪谷社1987
- (セバス) 『セバスチャン』 松浦理英子(1958女) 河出文庫1992(1981『文藝春秋』)
- (ダイヤ) 「ダイヤモンドダスト」 南木佳士(1951男) 同(青桐)14(1988『文学界』)

- (尋ね) 『尋ね人の時間』新井満(1946男) 同(青桐)14(1988『文学界』)
- (旅は) 『旅は悠々』戸塚文子(1913女)講談社1983
- (つれづ) 『つれづれの味』増田れい子(1929女)北洋社1978(1977『毎日グラフ』)
- (天声) 『続・深代惇郎の天声人語』深代惇郎(1929男)朝日新聞社1977
- (天声) 『天声人語・人物編』辰濃和男(1930男)朝日新聞社1987
- (天声) 『天声人語・自然編』辰濃和男(1930男)朝日新聞社1988
- (桃花) 『桃花流水(上)』陣舜臣(1924男)中公文庫1982(1975、76朝日新聞連載)
- (共に) 『共に生きるよろこび』阿部光子(1912女)水書坊1991
- (はまな) 『はまな物語』三浦哲郎(1931男)講談社文庫1982(1981、82読売新聞連載)
- (演を) 『演をたらした神』吉野せい(1899女)彌生書房1975
- (フィリ) 『フィリピン僻地紀行』妹尾燕一(1948男)連合出版1984
- (光る) 『光る壁画』吉村昭(1927男)新潮文庫1984(1980読売新聞連載)
- (冬の) 『冬の椿』芝木好子(1914女)集英社文庫1987(1971講談社)
- (紅花) 『紅花』井上靖(1907男)文春文庫1980
- (北京) 『北京の銭湯で』小宮山猛(1940男)朝日新聞社1989
- (放浪) 『放浪家族』船山馨(1914男)集英社文庫1979(1970河出書房)
- (マダム) 『マダム貞奴』杉本苑子(1925女)集英社文庫1980(1975読売新聞社)
- (まどう) 『まどう(上)』瀬戸内晴美(1922女)新潮文庫1981(1976、77毎日新聞連載)
- (IPAL) 情報処理振興事業協会技術センター 1990『計算機用日本語基本形容詞辞書
IPAL(Basic Adjectives)』情報処理振興事業協会

【主要参考文献】

- 石綿敏雄・荻野孝野(1983)「日本語用言の結合価」(『朝倉日本語新講座3 文法と意味I』
(付録2) 朝倉書店)
- 言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 情報処理振興事業協会技術センター(1990)『計算機用日本語基本形容詞辞書IPAL
(Basic Adjectives)』情報処理振興事業協会
- 西尾義弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 仁田義雄(1980)『語彙論的統語論』明治書院
- 朴 海煥(1995)「〔関係〕を表す形容詞述語文の構造」(『早稲田日本語研究』3
早稲田大学国語学会)
- (1996)「形容詞文における助詞「に」の用法」(『早稲田大学大学院文学研究
科紀要』第41輯第3分冊 早稲田大学大学院文学研究科)
- 森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- (1996)『意味分析の方法—理論と実践—』ひつじ書房
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院